

## 「ひきこもり支援の出発点」

沖下昌寛

まずは理解を

3年程前から、ひきこもっていたころの出来事を思い出すようになりました。一九七八年の五月半ばに大学に行かなくなり、何もしないまま五年近く過ごしましたが、やがて少しずつ外出するようになって、就職することもできました。今、二〇一一年五月は、それから三十三年後になります。イエズス会ブラザーという自分の立場から、副業として（事実副業ですが、私の使命感のうえでは本業なのです、）所属共同体の使徒職の一つとして、ひきこもり支援を始めました。

ひきこもり支援はまず理解に始まり、評価、医療、就学、就労と続くのですが、評価以降に関してはそれぞれ専門家がたずさわります。しかし、最初の第一歩であるひきこもり理解は誰にでもできることだと思っています。知らせる人がいれば、多くの人びとがひきこもり現象を理解するようになります。私は元ひきこもりの当事者として、ひきこもり現象を語ることから、本人も家族も居やすい社会をつくりたいと思います。当時の経験をもとにひきこもり本人や家族の方々を支えたいという望みを持っています。

当時、こんなことがありました。母が買い物から帰って来るなり、いつもとは違って部屋までやってきたのです。息を落ち着かせながらこういいました。「もう、何とかして。今近所の人から『息子さんお見かけしませんけど。ご留学ですか？』と言われて」少し間があって、母は続けました。「応えられないし、居合わせた人たちから馬鹿にされて、笑われて、こんな、情けない、何とかしてくれたらいいのに、どうして。」と言うなり泣き崩れてしまいました。

その時、もし母が「息子はひきこもっています」と応えることができていたら、そして、「ひきこもり」とはどのようなことなのか、近所の人たちが少しでも知っていたらどうだったでしょうか。

父と母は私のひきこもりのことで苦しんでいました。その苦しみを癒すようなことは、本来ありえないと思っています。しかし、そもそも苦しんでいると知りながら遊びで人を突くような人たちはいなくならないかもしれませんが、心ない人の様子に内心反発を感じていても何も言えない人たちも少なくなかったと思います。本人や家族と周りの人たちが、このことを言い表す共通のことばがあるとなれば「ひきこもり」と言う言葉だったと思います。

最近はお話せば分かってくださる方たちと、少しずつですが話せる雰囲気になってきていると思っています。

#### 当事者として語ることの大切さ

親や兄弟は、家族のひきこもりの影響で周囲から孤立してしまっていないでしょうか。兄弟姉妹が続けてひきこもってしまわないために、自分の立場をどうしたら確保できるのでしょうか。ひきこもりに、自分と近い感じを抱いている大勢の人たちは、仮にひきこもり本人と同じものをもっているのなら、どうしてひきこもらずにいられるのでしょうか。本人も家族も居づらいところがある社会なら、一人ひとりの心から始めて、やがて社会が変わるまで、より良くしていくために私は当事者として語るつもりです。

三年前には考えていなかったことを考え、二年前にはしていなかったことをしています。そのきっかけは聖書のことばです。

申命記五章の中で「あなたたちはかつてエジプトの国で奴隷であった」と語られています。このみ言葉が、私にとっては「あなたはかつてひきこもっていた」と、「奴隷」が「ひきこもり」に置きかわって響いたのです。自分がひきこもっていた時があることは分かってはいても、全く大切にしていまませんでした。昔の話だから今はそんなことはないと思っていました。しかし実は、ひきこもり体験がとても大きな出来事だったと思い直して、私が今ここから始めることは「かつてひきこもりだった」ことから始めるのだと思うようになりました。

学校が嫌いなのに、学校教育を使徒職の一つの柱にしているイエズス会にあって、私はどうなるのだろうと思った末に、もし「植えられたところに咲きなさい」と言うのなら、私はイエズス会に植えられた元ひきこもりなのだからイエズス会で一花咲かせようと思ったりしました。

自分自身を振り返りながら、実は社会参加を回避するほどではないけれど、多少は躊躇するところがあることに気がつきました。だからこそあえてやってみようと思い、この三月に、東京教区司祭月例集会に参加し、「ひきこもり支援」の活動をお知らせさせていただきました。意味のあることだから聴いてほしい、分かってくださる方に出会いたい、というような思いで話しました。また一方では、これは元気な活動にはならないものだな、教会活動としてはどうなのかな、形になりにくいだろうし迷惑とは言いわなくても、第三者としては扱いつらいのではないのかな、と感じていました。

#### 親の気持ちを傾聴して

現状をみると心ある司祭やシスターのもとへ相談におもむく信徒がいます。しかし他方で話を聴いてほしいのに、受付の前で立ち止まり、何も言えない信徒もいます。教会に何かの糸口があったらいいと思っているのに、小教区の内部手続にたじろぐばかりで、係の人に説明しなければならないと思うと、うんざりなのです。

こんなことは、仕方がないのでしょうか。教会で何も無いのは、まだ誰もしていないからではなくて、実は教会では無理なのかもしれません。という言いすぎかなと思いつつ、実際のところできる教会もあればできない教会もあるのは確かだろうと思っています。

この三月から「親の集い」を開いています。やってみて初めて、支援者に求められるものを知るようになりました。いろいろなことが、初めてしなければならないこととして、自分の前に置かれました。一つずつ手に取ることになりました。

人の話を聴く、それは傾聴することだと知っていましたし、自分なりのイメージも持っていました。でも、私が相手の話を傾聴する時、私は何をどうしたらよいか分かりませんでした。経験不足からこうなるのです。話し相手の言葉が私の胸に当たると、痛みを感じるため、胸に当たらないように手で止めて頭に入れるのです。それでも、言葉を胸に当てて受けとめようと思っただけはいるのです。ただ黙って聞いていることが多いのですが、なまじ私自身がこの当事者だから、「ひきこもっている息子」の立場に立って聴いてしまっています。自分のことは別にして相手の立場に立って話を聴くようになりたいと感じています。相手の立場が分かるのなら、畑の中に真珠を見つけたみたいに、傾聴できるような気がしています。ただ、私は元ひきこもりの当事者だからなのか、社会生活が下手で、できないことが人よりも多いです。それでも少しずつこれからの構想を練っているところです。

#### 本人と関わりたいという望み

これからは、やはり本人に届くことをしたいのです。直接かかわり、一人ひとりを支援できないかな、と思い浮かべています。まず、インターネットを介してのかかわりができないだろうか。次に訪問して支援できないだろうか、などと考えています。

私がひきこもっていたころは、インターネットはまだなかったのですが、今ひきこもっている人たちはウェブ社会との接点を持っているようです。ですから電子メールをやりとりできればと思ったのですが、なかなかそうはいきません。本人から連絡してもらおうための工夫が大変なのです。少なくとも

ひきこもっている人から、直接にメールアドレスを聞くことはできません。それで思いついて「親の集い」に参加した方から本人の名前を聞いてハガキを出すことを始めました。

さらなる構想に向かって

三つ目は、グループホーム構想です。社会参加を回避するひきこもり状態から、社会生活を取り戻そうとする時期のひきこもり本人のための生活訓練所のようなイメージです。そこでは、まず朝起きること、掃除洗濯をすませて朝食をとることから始めます。お金をかけずに営むために、人は使わない自分たちのことは全部自分たちでやる。自分の生活ができる分、ひきこもり気味であっても、仕事も勉強もできると信じて生活が営める援助をするために、十人程度のグループで一緒に生活したいと思っています。

この構想のきっかけは次の体験を思い出したときでした。私は五年近く、家から一歩も出なかつたのですが、靴をはいたとき足が痛くて、出かける前に帰りたくなったり、外に出てはみたものの、バスの乗り方が替わっていて、どうしたらよいか分からなくなってしまったり、何となくたたずんでしまったりしていました。「クツをはいたときに足が痛かった」と話しても誰も分かってくれませんでした。今話しても聞き返されるのです。足が靴に慣れていない、ブヨブヨの足になってしまうのです。何年も靴もサンダルもはかないで室内だけで過ごす人は、ひきこもりだけではないと思いますが、珍しいのでしょうか。自分だけの気になる感じ、周囲の様子になじめなくて神妙な感じに陥ってしまうのです。この時期に味わう出来事は、どれもこれもささいなことながら、本人にとっては一つひとつが課題になるのです。ひきこもりの人たちが外へ出る時、そういう時期があるから、そのためにと思っています。

ひきこもり支援を形にするために「七十二人の集い」を設立し活動を始めました。ルカ福音書十章にある七十二人の弟子の派遣にちなんで命名しました。遣わされる弟子たちに伝えられたことが、支援を形づくるのだと思っています。そして派遣された弟子たちが成果を報告した姿を大切に心にとどめて、私も同じように喜んで「できました。悩み苦しむひきこもり本人と家族の人々を癒しに導きました。」と言いたいのです。

(『福音宣教』2011年7月 オリエンズ宗教研究所)